

# 反核医師の会

HANKAKU  
ISHI no KAI News

Physicians Against Nuclear War (PANW)  
核戦争に反対する医師の会  
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-5-5  
新宿農協会館 全国保険医団体連合会内  
電話 03(3375)5123 FAX 03(3375) 1885  
e-mail: panw@doc-net.or.jp  
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

## 核も基地もいらぬ命どりの島の島から 東アジアそして世界の平和を希求する 第34回反核医師のつどいin沖縄開催(11/3・4)

### 沖縄に 160人が 参加

(オンライン含め210人)



全国から160人が沖縄会場に参加

### 反核医師のつどいin沖縄 概要

● 実行委員長 樋口 豊

#### 1日目

##### 記念講演とシンポジウム

はじめの全体会では、照屋義美沖縄県副知事がご来場され、玉城デニー知事からのあいさつを代読いただいた。

また、つどいには日本医師会、広島市、長崎市から後援・メッセージをいただき、国会議員や核兵器廃絶をめざす団体からも連帯メッセージが寄せられた。

#### 2日目

『台湾有事 日本の選択』の著者、ジャーナリストの田岡俊次氏の記念講演は、アクシデントで来場が困難となったためビデオメッセージを閲覧いただいた。

田岡氏曰く、台湾の大半の人は「戦争をする理由がない」と考えているはずであり、日本が米国追従姿勢のままで有事とすることは、実に馬鹿げている。70万ともいわれる在日中国人とも仲良くして

いくべきである。田岡氏の講話の後は、徳田安春医師(群星沖縄臨床研修センター長)のコーディネーターによる国際シンポジウムとなり、お三方が登壇された。台湾からのゲスト、家庭医・作家の楊斯格(Yang Szu Pang)氏は、医師として作家として多種多彩な才覚を持ち活躍されていることが印象的であった。

また、台湾のリーダー達は「原発を持たない」と強く主張していることが報告されたが、それは平和と安全・人々の生活を守る観点から、我が国のリーダーとはケタ違いに頼もしいと感銘を受けた。

駒込武教授(京都大学)は、「台湾と沖縄 からまりあう苦難の歴史」をテーマに平和な未来を考えよう(YouTube動画あり)の講話で、台湾処分と琉球処分近代史を中心に据えて、原住民の視線をもって熱く語られた。そして、「台湾海峡は現状維持が理想、というより現実的といえる」という平和維持を求める言葉でしめくくった。

下地陽一医師(宮古島・城辺中央クリニック副院長)は

反核医師の会は、昨年11月3、4日に沖縄県那覇市で「第34回反核医師のつどいin沖縄」を開催した。メインテーマは「核も基地もいらぬ命(ぬち)どりの島の島から東アジアそして世界の平和を希求する」とし、沖縄と台湾の交流の歴史や中国との関係、沖縄のミサイル基地化を巡って講演やパネルディスカッションが行われた。沖縄会場には、全国から160人が参加し、オンライン参加と併せて約210人が参加した。実行委員長の樋口豊氏より、概要を報告する。

宮古島出身の父と台湾出身の母を持つ方で、ご自身も北京の大学で医学を修め台湾で救急医として勤務した経歴がある。講話では、日清戦争後の台湾割譲より前の1872年の「牡丹社事件」を紹介され、その約100年後より当時の被害者の遺族同士が平和と交流を始め、今では国際交流と平和を訴えるNGO団体が発足したこと等を報告された。

質疑応答には、50に近い質問が寄せられて時間不足であった。参加者の関心の高さや、平和を願う意識の顕れであることが受け止めている。

現地からの報告  
各地からの報告として  
①うるま市自衛隊訓練場建設を断念させるまで  
②辺野古基地建設の反対活動  
③石垣島基地問題について  
④宮古島のミサイル基地について現状を話してもらった  
どれも、「静かに平穏な暮らしを、安心して子育てを、戦争に巻き込まれるのも相手国を傷つけるのもイヤ。」愛と平和の世界を強く望む気持ちが伝わる報告であった。

最後の全体会では、向山新反核医師の会代表世話人がまとめを行った。また、大阪の中村新太郎先生がDBOBの取り組みについて、若手医師からは、いっぽプロジェクトの取り組みについて、長崎大学医学部5年の森爽さんからは学生部会の取り組みについて、それぞれ報告があった。それぞれが前向きに活動を展開して頑張る様子が伺えた。若い世代の躍動は頼もしく夢を抱かせてくれる。いつの日か、国も民族も世も超えて『核廃絶と世界平和の実現』に到達することを祈りたい。

最後にアピールが会場の拍手で採択された。  
ご参集いただいた皆様、会場の準備から円滑な進行等にご尽力いただいた事務局および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

### ガンマ線

放射線とは、科学的にいうと、高いエネルギーをもち高速で飛ぶ粒子(粒子線)と、高いエネルギーをもつ短い波長の電磁波の総称である。この中でアルファ線(α線)、ベータ線(β線)、ガンマ線(γ線)、X線、中性子線が主な放射線である。アルファ線、ベータ線、中性子線は粒子、ガンマ線とX線は電磁波である。

飛ぶ距離が長いので、全身に影響を及ぼす可能性がある。またガンマ線はコバルト60やセシウム137などの放射性物質の自然崩壊により発生する。ガンマ線はガンマ線は粒子ではなく光子であり、光子の中でも特に高エネルギーのものに分類される。エネルギーが高いので、ガンマ線はきわめて危険で、大規模な遮蔽でも通過してしまう。人体の細胞にさまざまな損傷を引き起こす。ガンマ線は原子核崩壊の過程で放出されるが、このとき通常はアルファ粒子とベータ粒子も生成される。

アルファ線は電離する量が極めて多いので、紙1枚で止まる。ベータ線は薄い金属板で遮蔽される。ガンマ線やX線は重い原子(原子番号の大きい原子)によく吸収される。そのため、鉄や鉛、あるいはコンクリートでしか遮蔽できない。コバルト60のガンマ線は人体の深部まで透過できるのでがんの放射線治療に広く使用されてきた。

またガンマナイフは脳腫瘍の手術で威力を発揮している。人体に危険なガンマ線もコントロールすれば医療用に活用されてきた。(T・K)



# 1日目と2日目の概要

## 1日目 記念講演とシンポジウム

群星沖縄臨床研修センター長 徳田 安春

私は記念講演とシンポジウムのモデレーターとして参加しました。記念講演の講師を予定していたジャーナリストの田岡俊次さんが会の前週にお怪我をされ、沖縄に来られなくなりました。そのため今回は、事前に一通り答形式でビデオ撮りをして、当日参加者へご覧いただきました。今回のビデオ撮影と編集には、デモクラシータイムスの方々にご協力いただきました。



徳田安春先生(左)、樋口豊先生(右)

シンポジウムの冒頭で、私から簡単に主旨をご説明しました。田岡さんの記念講演では、台湾有事の現実的リスクは低いこと、台湾の大多数の人々は現状維持を望んでいること、米国と中国も直接対決を考えていないことを、論理的に話されていました。

次に、京都大学教授の駒込武先生からは、台湾の歴史について学術的議論も交えたお話がありました。台湾と沖縄が絡まり合う苦難の歴史として平和な未来を考えようという内容。世界史の中で台湾を受けた、大国による植民地支配の歴史です。



楊斯梧先生



駒込武先生



下地陽一先生

その後、質疑・討論で駒込先生からは、台湾の歴史について学術的議論も交えたお話がありました。台湾と沖縄が絡まり合う苦難の歴史として平和な未来を考えようという内容。世界史の中で台湾を受けた、大国による植民地支配の歴史です。

駒込先生によると、アジア太平洋戦争の前、日本が琉球処分を実施しただけでなく、日清戦争の勝利で台湾を支配したことは、日本による一連の南西アジア支配という野望の完成形であった。戦後の1972年に、日本が「台湾は中華人民共和国に帰属する」と認める代わりに、日本は中国への巨額の戦争賠償を逃れることができた、という。続いて、下地陽一先生

にお話しいただきました。下地先生は、台湾出身の母と宮古島出身の父を持ち台湾で生まれ、幼少期は台湾と日本双方で育ち、高校卒業後は北京に6年間留学しました。2005年には台北の大学卒業後、救急医として2012年から大病院に勤務したあと、21

## 2日目

### 基調講演と現地からの報告など

沖縄県保険医協会会長 高嶺 朝広

2日目前半は、「沖縄の基地問題について考える」をテーマに沖縄国際大学の前泊博盛教授が講演された。座長は沖縄県保険医協会の座副会長。

2日目後半は、実際に沖縄各地から取り組みについて報告があった。「ミサイル配備から沖縄を守る市民の会」の共同代表の伊盛サチ子さんから、うるま市の勝連分屯地に地対艦ミサイル部隊の配備について、基地のわずか200メートル先には与勝高校・緑が丘中学校などがあり住宅地に密着していることが紹介された。また、2023年12月20日、うるま市のゴルフ場跡地に陸上自衛隊訓練場の建設計画が明らかにになり、瞬く間に反対の住民運動がおこった。市議会・県議会も全会一致で白紙撤回を決議、2024年4月11日、木原防衛相が白紙撤回を表明。これは、私たちにとても勇気を与えた。

「石垣島の平和と自然を守る市民連絡会」事務局局長の藤井幸子さんから、石垣島について報告があった。2023年3月16日に開設された石垣駐屯地には、警備部隊、地対艦ミサイル部隊など合わせて570人。配備後も基地の拡大強化が進められており2022



高嶺朝広先生

民はこの問題に翻弄され続けている。2019年に行われた「県民投票」を含め、地域住民・沖縄県民・県知事に至るまで、あらゆる機会に新基地建設反対の意思を示し続け、10月27日にはオスプレイが与那国島で事故をおこした。

石垣島港がイージス艦、空母クラスが入港できるように整備するため特定利用港湾に指定された。軍事力ではなく、話し合いによる平和維持の枠組みをつくること大切である。

「宮古島住民連絡会」共同代表の上里清美さんからは、宮古島の軍事施設の報告があった。航空自衛隊レーダー基地、2019年に開設された陸上自衛隊宮古島駐屯地警備部隊・地対艦ミサイル部隊、2022年保良訓練場開設、2024年度中に電子戦部隊配備。政府は重要拠点空港・港湾として下地空港・宮古空港・平良港の指定を打診。指定されると軍事空港として国際法上では攻撃対象になる。戦争が始まれば、真先に相手国のミサイル攻撃のターゲットとなることは明らかである。地元民をたぶらかして基地をつくり巻き込んでいったことに怒りを感じた。「私たちは、静かで安心して暮らせる宮古島、未来に生きる子供たちが戦争に巻き込まれないことを願う。島を破壊し、住民の命・暮らしを破壊する戦争の準備をしないでほしい。宮古島で起きていることは日本の国の在り方であり全国の問題。日本全体の民主主義、平和、人権の問題です。一緒に考え、声をあげましょう」この訴えに心から賛同し、活動していきたい。



前泊博盛先生



各地からの報告者の皆さん

# 反核医師のつどいin沖縄

## 沖縄ファイルドワーフ報告

反核医師のつどいin沖縄の開催前の午前中、いっぽプロジェクトによるファイルドワーフが開催された。その報告をプロジェクトの丸橋さんに寄稿いただいた。

ABC for Peace(いっぽプロジェクト)

介護福祉士 丸橋 郁弥



南風原壕群第20号の入口

沖縄で開催された「反核医師のつどい」での学びをより深めるため、私たちがいっぽプロジェクトでファイルドワーフを企画いたしました。単に悲惨さだけを残す歴史上の問題にはせず、今に繋がる学びになるよう検討。「私たちがガイドを作ろう」というテーマを設定しました。企画参加者は本プロジェクトメンバー含め、医師、医学生を中心に34名。ファイルドワーフでは、第2次世界大戦時に実際に陸軍病院として作られ運用された「南風原壕群第

20号」がある南風原文化センターを訪れました。8〜9人で1グループとなり、戦跡を見学。第20号壕内を再現した常設展示を見学したあと、当時の看護婦やひめゆり学徒が食料運搬で使った飯上げの道を通って第20号壕へ向かいました。気温30度ほど。整備された道を進むのも大変な傾斜を、戦時中は14〜5kgの食料を2人がかりで肩に担いで運搬していたと聞いて驚きました。実際の壕内に足を踏み入れ、さらに驚いたの



は暗さと狭さ。大人が中腰にならないと天井にぶつかってしまうような状況で、80年ほど前は負傷兵の手術や処置が行われていました。懐中電灯が無いと、壁が目前にあることすら分からない暗闇に、当時の患者の悲鳴や排せつ物の悪臭が充満していたと思つと、息が詰まる思いです。

ファイルドワーフ後は、沖縄協同病院の会議室をお借りして、グループディスカッション。4名ずつグループに分かれ、第20号壕の感想交流の後、「自分ならどんなガイドをしますか」というテーマで自由に討論しました。出身地や所属、これまでの経験が違う参加者同士が、自由に意見交換



第20号壕内を見学



つどいでいっぽプロジェクトの報告をする青年医師・医学生たち

私が感じたのは、地域差のある平和教育の問題、また受けた平和教育をどう自分事として結び付けていくのが重要という点です。私

たちが、医療者という視点でかつて陸軍病院として使われた壕を見学しました。アナログな方法ですが、戦跡に足を運び、自分の目で

見、今で生活している人の話を聞く。かつて戦争で亡くなった人々と同じように命を落とす可能性は、今を生きる私たちにも等しくあるという事を実感するのではないでしょう。か。誰もが自分の大切な人仲間たちに、尊敬ある人生を送ってほしいと思えます。その思いが重なって、平和が作られるのだと認識できました。

### 参加した医学生の感想

平和の中で医療を提供できるように取り組んでいきたい

神戸大学 3年 梶原 悠花



けないという思いを抱くようになってきました。戦争という非日常に感じていた言葉がすくそばに迫っている実

周囲の人に平和の大切さを伝えるため声を上げていきたい

佐賀大学 4年 入戸野 彩



国際通りを歩いていると陽気な音楽があららこちらから聞こえてきます。初めて降り立った沖縄はとても明るく見えました。事前学習をしてきたこともあり、

目前の光景と沖縄が抱えている問題や暗い過去とのギャップに驚き戸惑いました。つどい前に訪れた「沖縄陸軍病院 南風原壕群20号」の中は衝撃的でした。鍾乳洞のようなひんやりとした場所を想像していたのですが、汗ばむ程に蒸し暑く、空気がこもっていました。11月での暑さなら夏はどれほど過酷な環境だったのでしょうか。このような場所が治るとは到底思えません。戦争が始まったら、立場の弱い人から死んでいくこと、不平等だと分かるのに何もできない状況になることをひしひしと感じ、悔しかったです。感想を交流しながら昼食を食べ、興奮冷めやらぬ

## ノーベル平和賞に日本被団協

2024年10月11日、ノーベル平和賞を、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)が受賞しました。

1945年8月、米軍が広島、長崎へ原爆を投下してから79年。非人道的な被害を世界へ告発し、「ふたたび被爆者をつくるな」と、核兵器廃絶を訴え続けてきた活動が評価されました。

10月12日、反核医師の会は、メッセージを発表しました。(ホームページ参照)



授賞式にあわせてノルウェー国会議事堂前で核兵器廃絶を訴える人々

# 核製造企業に投資やめよ

## 被爆地・広島でアピール

近畿反核医師懇談会は、金融機関による核兵器製造企業への投融資をやめさせる「Don't Bank on the Bomb」(DBOB、核兵器にお金を貸すな)キャンペーンを推進するため、2024年8月4～5日に広島市内でアピール行動に取り組んだ。原水爆禁止世界大会が開かれることに合わせた行動で、全国の保険医協会、反核医師の会から20人超が参加した。

同懇談会は原爆ドーム前や駅頭など広島市内各地で宣伝行動を実施し、「日本のメガバンク3社が5兆円ものお金を核兵器製造企業に投融資している」と告発。「私たちのお金が知らないところで核兵器づくりに使われている。金融機関による投融資をストップさせよう」と呼びかけ、DBOBを知らせるパンフレットを配布した。DBOBキャンペーンソングを流しながら商店街を練り歩くと、買い物客の注目を集め、「被爆国の日本の銀行が核兵器に融資しているなんて知らなかった。許せない」などの声が寄せられた。

せられた。

### ICAN川崎氏 駅前宣伝に参加

広島駅前での宣伝には、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)国際運営委員の川崎哲氏が参加。同氏は「世界では核兵器製造企業への投融資を禁止する金融機関が増えている。核なき世界へ一人ひとりの行動が求められている」と呼びかけた。DBOBキャンペーン事務局長で医師の松井和夫氏は「金融機関で自分たちのお金の使われ方を尋ね、核兵器に使わないよう思いを伝えてほしい」と運動への参加を訴えた。

同会はアピール行動を通じて5000部を超えるDBOBパンフレットを配布。「知人に配りたい」と複数部持ち帰ったり、受け取った市民がSNSで発信したりするなど大きな広がりがあった。



原爆ドームでのアピール行動 (8・5)



フコク生命との懇談のもよう (9・2)



DBOB キャンペーン  
←サイト、Youtube→



## 生命保険会社と懇談

保団連と近畿反核医師懇談会は、2024年9月2日にフコク生命、11月11日に明治安田の2社と懇談。核兵器への投融資禁止を求める取り組みに理解を求めた。

懇談には、松井和夫 PANW 世話人(和歌

山)、中村新太郎 PANW 世話人(大阪歯科)が参加。フコクとの懇談には、保団連共済部長の森明彦氏、明治安田との懇談には保団連名誉会長の住江憲勇氏が参加した。

両社とも核兵器への投融資については、基本的には禁止ということで認識が一致した。

## 日本政府も核兵器禁止条約に参加を 外務省に要請 3団体共同 (12/20)

12月20日、反核医師の会、保団連非核平和部、近畿反核医師懇談会は、合同で外務省要請を実施した。共同代表ら10名が参加しました。外務省からは軍備管理軍縮課担当官らが対応した。

核兵器禁止条約(TPNW)への日本の参加などが主なテーマとなった。TPNWには、ドイツなどのいわゆる「核の傘」の下にあるアメリカの同盟国の一部が参加していることから、日本のオブザーバー参加に関連して「それらの諸国の状況を検討している」との回答があった。ただ、中川代表世話人の「状況を確認するためにも、日本としてオブザーバー参加するべきではないのか」との問いかけに対しては、「参加すると何らかの発言等をするようになるため、



外務省に要請書を手渡す  
代表たち (12・20)

そうなった場合にどのような影響があるのか検証する必要がある」との回答に留まった。

## 長崎の被爆体験者も被爆者として認定せよ

岸田首相(当時)は2024年8月9日、被爆体験者との面談で「早急に課題を合理的に解決できるよう」指示した。9月9日の被爆体験者訴訟長崎地裁判決では、提訴した被爆体験者の一部を被爆者と認めた。これを受け、長崎協会は、9月19日に厚生労働省に控訴しないよう要請するとともに、すべての被爆体験者を被爆者と認め被爆者健康手帳を交付するよう求める要請書28,017筆とネット署名1004筆を提出した。要請には長崎協会の本田孝也会長、保団連の天谷静雄副会長らが参加した。

厚生労働省からは田邊鍊太郎地域保健企画官が対応した。田邊氏は、提出された署名や長崎

県・市両議会の控訴しないことを求める意見書など、県民の声は重く受け止めるとの回答もあった。本田会長は、少なくとも控訴しないことを強く求めるとともに、広島判決と同様の基準で被爆体験者を被爆者と認め、被爆体験者精神影響等調査研究事業の拡大などで終わらせることのないよう求めた。

しかし、岸田氏は9月21日に「被爆者と同等の医療費助成を行う」と表明する一方で、裁判については控訴することを表明した。今回の控訴は、これらの発言と相反するものであり、高齢化する被爆体験者の救済を遅らせるもので、到底容認できるものではない。

## 会費納入のおねがい

(2024年4月1日～2025年3月末)

反核医師の会は、会員みなさまの会費と、主旨に賛同いただいている募金によって運営しています。

2024年度(2024年4月1日～2025年3月31日)の会費納入のほど、よろしくお願ひします。

個人会員(医師・歯科医師、医学者) 10,000円  
専攻医 5,000円  
研修医(卒後2年まで) 3,000円  
医・歯学生会員 1,000円  
賛助会員 1,000円

振込先

◇りそな銀行 新都心営業部 普通 1557502

「反核医師・医学者の集い」

◇ゆうちょ銀行(他銀行からの振り込みの場合)

○一九支店 当座 0056764「反核医師・医学者の集い」

◇郵便振替00170-7-56764「反核医師・医学者の集い」

## 核兵器禁止条約第3回締約国会議に、 青年医師と医学生の名を派遣

### カンパへのご協力をお願いします

2025年3月3日からニューヨークの国連本部で開催される核兵器禁止条約第3回締約国会議に、反核医師の会から青年医師と医学生の名を派遣します。参加するのは、宮崎医療生協病院研修医の荒木さくらさんと長崎大学医学部5年生の森爽さんです。

カンパへのご協力をお願いします。同封の払い込み用紙でご送金ください。ご送金の際「代表派遣カンパ」とご記載下さい。